

ログアウト不能のVR  
ゲームでゲームマスター  
に「出たけりゃカン  
トで払え」と囁かれ感  
度10倍の仮想世界で  
何度も中出しされて現  
実の身体もびしょ濡れ  
にされる話

「はっ……♡ あ、あ……っ♡♡」

ログアウトボタンが消えている。

メニュー画面のグレイアウトした表示を何度タップしても反応がない。強制終了コマンドも、GM コールも、何ひとつ応答しない。

——深夜2時。限定ボスレイドに全課金装備で挑んで全滅して、リスボン地点の廃墟の教会に叩き戻されたところだった。

ため息まじりにログアウトしようとして、それが出来ないと分かった瞬間、腹の底がすうっと冷えた。

「困ってるみたいだね」

背後で、聞いた事のないシステム音が鳴った。

振り返ると、祭壇の縁に腰掛けた男がいる。黒いロングコート。深く被ったフード。頭上に GM 専用のアイコンが浮かんでいて、金色の瞳だけが暗がりの中で光っていた。

「お前のポッド、NeuroSync-IV の中古だろ。あの型番、最新パッチと互換性に問題があってさ」

男——アーカスが、祭壇からゆっくり降りて距離を詰めてくる。

陽太は一步退いた。退いた背中が崩れかけの石柱にぶつかる。

「ログアウト信号、俺の側からしか通せないんだよね」

「……出して、ください」

「出してやってもいいけど。タダは嫌だな」

アーカスが指を弾くと、陽太の課金履歴がホログラムで展開された。30万を超えるクレジットカードの請求額が空中に浮かぶ。

「金はないよな」

嗤うように言って、アーカスがもう一度指を鳴らした。今度は陽太のアバター情報が展開される。ステータス、装備、スキルツリー——その下に、赤い文字で「性器タイプ：カントボーイ」と点滅していた。

「自分で設定したんだよな、コレ。現実の身体に合わせて。——律儀だねえ」

血の気が引いた。

（誰にも知られたくなかったのに……っ）

ゲームの中でまで隠していた筈の秘密が、この男には全部筒抜けだった。

「俺の言うこと聞いたら、出してやるよ」

「なに、を——」

「まずは身体検査から」

アーカスが指を鳴らすと、空間が書き換わった。

廃墟の教会が消え、白い無機質な部屋が現れる。中央に拘束具のついた診察台。壁も床も天井も、継ぎ目のない白。逃げ場のない箱。

「フルダイブVRでカントボーイのアバター使ってるプレイヤーなんて初めて見たよ。興味あるから、ちょっと調べさせてくれない？」

「ふざけ——っ」

抵抗しようとした瞬間、身体が動かなくなった。指先一本、動かせない。

GM権限によるアバター行動制限。自分の意思が、自分の身体から切り離される。

気づいた時には診察台の上に横たえられていた。

アーカスが指を弾くと、アバターの装備が一瞬で全解除される。銀髪の弓使いの姿が消え、陽太の素の身体が晒された。

華奢な身体。不健康に白い肌。そして脚の間にあるのは

---

「へえ……ちゃんとモデリングされてる。VRでここまで再現できるんだ」

アーカスの視線が、脚の間に注がれる。

(やだっ……見ないで……っ♡)

叫びたいのに声が出ない。行動制限は声には及んでいない筈なのに、羞恥で喉が張り付いていた。

「感度、等倍じゃつまんないな。——2倍にしようか」

ステータスウィンドウが視界の端に点灯した。

『快感感度：×2.0』

「ッ……♡」

アーカスの指先が、カントの割れ目に触れた。

ただ触れただけ。なのに身体の芯をまとめて掴まれたみたいな衝撃が走る。

「んっ……♡♡ な、に……これ……っ♡♡」

等倍なら耐えられた筈の接触が、2倍の感度ではまるで別物になる。指先の温度、指紋の凹凸、爪の先端の僅かな硬さ——全てが鮮明に伝わってくる。

「いい反応。——クリトリスはどこかな」

「やっ……♡♡ さわらな——ああっ♡♡♡」

アーカスの親指が、割れ目の上端にある小さな突起を捉えた。皮ごと、ぐに♡と押し潰す。

「ここか」

「ひ……っ♡♡ ひんっ……っ♡♡ やめ……そこ、だめ……っ♡♡♡」

行動制限で身体は動かせない。逃げられない。声だけが自由で、それが余計に惨めだった。

アーカスは実験するように、指先でクリトリスを転がす。  
ぐり♡ぐり♡と指の腹でゆっくり円を描いて、その度にカントの入口がひくっ♡ひくっ♡と開閉した。

「っ♡っ♡ はあ♡ はあっ……♡♡ んんん……っ♡♡」

（やだ……っ♡♡ なんで……っ♡ 男なのに……こんな所触られてっ♡♡ 気持ちいいなんて……おかしい……っ♡♡）

自分のコンプレックスの核を、知らない男に暴かれている。しかも気持ちいい。認めたくないのに身体が勝手に反応して、カントの入口からじわ♡と透明な液が滲み出した。

「濡れてきた。——2倍だとこんなに反応するんだ」

「ちが……っ♡♡ ちがう……っ♡ ぬ、濡れてなんか……っ♡♡」

「嘘つくなよ。ほら、見えてるぜ」

アーカスが指を一本、ゆっくりとカントの入口に沈めた。

ずぷ……♡♡

「ふあ……っ♡♡♡ お……っ♡♡ ゆ、ゆび……っ♡♡ なかに……っ♡♡♡」

処女のカントが異物を咥え込む。痛みはない。VRの設定で痛覚がカットされている。痛くないのに、中を押し詰められる圧迫だけが2倍の鮮明さで届く。指の第一関節、第二関節、根元まで——壁に触れる指の輪郭が、克明に分かる。

「VRって便利だよな。痛覚だけカットして、快感だけ残せるんだ」

「っ……♡♡ はぁ……♡♡ うご、かさないでっ……♡♡♡」

動かすなと言ったのに。アーカスの指は中でゆっくりと曲がり、壁をなぞった。

ずり……♡♡と、内壁の柔らかい肉を指の腹が撫でる。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ やっ♡ やだっ♡♡ なか、かき回さないでえ……っ♡♡」

ぐちゅ♡ぐちゅ♡と、愛液が掻き混ぜられる音がする。

（うそ……っ♡♡ 僕の中から……こんな音……っ♡♡ 自分で触った事すらないのになっ♡♡）

アーカスの指が、壁のある一点を擦った。

「ひゅっっ♡♡♡」

「——ここか。Gスポット」

「やっ……♡♡ そこっ、そこだめっ♡♡ ぜったい……だめ……っ♡♡♡」

ざらついた壁を、指先がピンポイントで抉る。こりっ♡こりっ♡と小刻みに擦られるたびに、下腹の奥から得体の知れない熱い塊がせり上がってくる。

（なに……これ……っ♡♡ お腹の底から……何か来る……っ♡♡ 怖い……こわいよぉ……っ♡♡♡）

「感度、3倍にするよ」

『快感感度：×3.0』

「ひゃっ……♡♡♡ ああっ……♡♡ さ、3ばい……っ♡♡ むり……3ばいむり……っ♡♡♡」

同じ指、同じ動き。なのに快感の波が一段跳ね上がる。指が2本に増えて、Gスポットを擦りながらピストンが始まった。

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡

卑猥な水音が白い部屋に反響する。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡ ひんっ♡♡ ひぐう……っ♡♡♡ おなか……っ♡ おなかの奥……へん、に……っ♡♡♡」

（だめ……っ♡♡ なにこれ……っ♡ こんな知らない……っ♡♡ お腹の奥が……きゅって……きゅうってなって……っ♡♡♡）

「もう子宮が反応してるな。指でここまで感じるんだ。——5倍にしたらどうなる？」

「や……っ♡♡ まっ……て……っ♡♡♡」

『快感感度：×5.0』

「ッッ♡♡♡♡」

視界が白く弾けた。

指が3本に増える。子宮口を指先でこっ♡こっ♡叩かれて、5倍の感度ではもう「叩く」なんて生やさしいものじゃなかつ



た。子宮の壁を内側から殴られるような衝撃が、快感に変換されて脳に突き刺さる。

「おおおっ♡♡♡ しきゅ……っ♡ しきゅう叩かないでえ……っ♡♡♡」

カントからぶしゅっ♡♡と液が噴いた。

初めての絶頂。全身がびくんっ♡びくんっ♡と痙攣して、行動制限されている筈の身体が微かに跳ねる。

（い……っ♡♡ イッ、た……？♡♡ こんな……指だけで……男なのにカントでイカされ……っ♡♡♡）

「いったのか。——ところでさ、これ知ってた？」

アーカスの声が、絶頂の余韻に沈む意識に届く。

「お前の現実の身体も、今同じ状態だよ」

「……え……？」

「NeuroSync-IVの神経フィードバック。ゲーム内の感覚刺激は現実の肉体にも反映される。つまり——お前のポッドの中、今パジャマの股間びしょ濡れだぜ」

（うそ……っ♡♡ ゲームの中だから……大丈夫だって……そう思ったのに……っ♡♡）

最後の防壁が、音を立てて崩れた。

「う、嘘……っ♡」

「嘘じゃないよ。ゲーム内でカントを濡らせば、現実でも濡れる。ゲーム内でイけば、現実でもイく。——お前の身体は今、二重に犯されてるんだ」

「やだ……っ♡♡ やだやだ……っ♡♡ そんなの……聞いてな……っ♡♡♡」

アーカスが笑った。口角は上がっているのに、金色の瞳は冷たいまま。

「じゃあ次、本番いこうか。——でもその前に」

GM 権限でアイテムが生成された。ゲーム内に存在しない特殊アイテム——透明な瓶に入った、うっすら発光する液体。

「感覚増幅の媚薬ポーション。飲めとは言わないよ。——ここに塗るだけだから」

瓶の口が傾いて、とろり♡と液がカントに垂れた。

「ひょっ……♡♡♡ あ、あちゅ……っ♡♡ な、なにこれ……っ♡♡ カントが……じんじん……っ♡♡♡」

じわり♡と熱が広がる。内壁がひくひく♡ひくひく♡蠢き出して、5倍の感度に媚薬の効果が重なり、空気に触れているだけで甘い疼きが止まらない。何も入っていないのに、カントの入口が勝手にぱくぱくと開閉する。

アーカスが陽太の行動制限を一部解除した。腰から下だけ動ける。

「逃げていいよ。——逃げられるならね」

腰が自由になった瞬間、反射的に脚を閉じようとした。

太腿がカントに擦れる。

「ひんっ♡♡♡」

媚薬で過敏になったカントが、自分の太腿の皮膚に反応する。閉じれば擦れる。開けばアーカスに晒される。

（どうすればいいの……っ♡♡ 閉じてても開いても……だめ……っ♡♡ 自分の身体が畏になってる……っ♡♡♡）

「っ……♡♡ うぅ……♡♡ やだ……うごく……じぶんで……っ♡♡♡」

「自分で自分を気持ちよくしてるみたいだな。——欲しいのか？」

アーカスが自分のアバターの下半身を露出した。太く、長く、血管が浮いて、先端からカウパーが糸を引いている。

「ち……っ♡♡」

見た瞬間、カントがきゅう♡と締まった。

（やだ……っ♡♡ 見ただけで……カントが反応して……っ♡♡ こんな……男としておかしい……っ♡♡♡）

「お前のカント、ずっとひくひくしてるよ。——入れてほしいんだろ」

「ち、ちが……っ♡♡ いらな……っ♡♡♡」

アーカスが肉棒の先端を、カントの入口に宛てがった。挿れない。先端で割れ目を上から下へ、ゆっくりなぞるだけ。

カリの出っ張りが肉ヒダに引っかかり、くりっ♡とクリトリスを圧迫する。

「おおっ♡♡♡ そこ……っ♡♡ カリで、クリ……こすらないでっ♡♡♡」

5倍感度で亀頭の熱さ、硬さ、脈動まで克明に感じ取れる。入口が勝手にひくついて咥え込もうとしているのが、自分で分かって死にたくなる。でもアーカスは入れてくれない。先端だけ浅く出し入れ。1センチだけ入って——抜ける。

ぬちゅ♡……♡

「あ……っ♡♡ も、もうちょっと……っ♡」

言ってから気づいた。自分が何を口走ったか。

「もうちょっと？ もうちょっと何だ？」

「ちがっ……♡♡ ちがう……今のは……っ♡♡」

「言ってみろよ。『入れてください』って」

首を振る。振りながら、腰が勝手にアーカスの先端を追いかけている。浅く引かれるたびに、カントが物足りなさに泣いている。

(なんで……っ♡♡ 中が空っぽなのが……こんなに苦しいなんて……っ♡♡ ゲームの中なのに……僕のカント……おちんぽ欲しがってる……っ♡♡♡)

「い……っ♡♡ いれ……っ♡♡」

「聞こえない」